

市史だより

F u k u o k a

26

史的再発見マガジン
[シシダヨリ・フクオカ]

Spring 2022

TAKE FREE

特集

みぎわの攻防

—大濠公園前史—

contents

- 08 市史編さん室トピックス
- 09 部会だより（考古・古代・中世・近世・近現代・民俗）
- 10 「新修 福岡市史」ナナメ読み
- 11 連載コラム「タイムマシンでとなりの駅へ」
- 12 連載コラム特別編「福岡市史への歩み」の歩み

特集

みぎわの攻防

大濠公園前史

福岡城のお堀が、その後たどった歴史とは。要害、漁場、住宅地……福岡市中心部の空地として人々の利害が錯綜した池。

文＝市史編さん室



福岡市中央区にある大濠公園は、広々とした水面を持つ池が特徴的な県営公園です。平成十九（二〇〇七）年には国の名勝にも登録され、ボート遊びや釣り、周回道路でのジョギングやウォーキングを行う人びとで、昼夜を問わず賑わっています。また、美術館、能楽堂、日本庭園もあり、文化に触れることができる場所でもあります。現在、多くの市民の憩いの場となっている大濠公園が今の姿になったのは、昭和元（一九二五）年開催の東亜勸業博覧会の跡地が同四年に公園として整備されて以降のことです。大濠の原型ともいえる堀ができたのは江戸時代のことでした。では、この堀はどのようなにして現在のような人気の公園になったのでしょうか。

● 大濠の誕生

江戸時代以前の大濠周辺は、『筑前国続風土記』に「入海の潟也」とあるように、「草香江」と呼ばれる入江でした。十七世紀初めに黒田氏の居城・福岡城の築城にともない、西側を守る防衛施設「大堀」として整備されました。築城開始から二年後の慶長八（一六〇二）年には、ひとまず大堀は完成します（「御入国御諸土屋鋪割帳」。寛永五（一六二八）年頃に福岡城下を偵察した幕府の隠密は当時の大堀を「海のごとく」に見たと記しています（『筑前筑後肥前肥後探索書』）。その後、約半世紀をかけて大堀は徐々に整備されていきます。

まず、水の流路ですが、十七世紀初めの大堀は樋井川の河口の入江として荒戸山（現 西公園）の東側で海と繋がっていました(1)。その後、寛永九年までには、樋井川の河口は大堀から切り離され西側に移されました。これは樋井川からの流水による大堀への土砂の堆積を防ぐ目的があったためとされています。それと併せて大堀の北西側に黒門川と菰川が開削され、堀の水は荒戸山の西側へと流されることになりました。次に、大堀の周囲の状況ですが、十七世紀前半の段階では、東側の城郭や北側の武家屋敷に接している部分を除いて、堀の南西側は葦原となっており、明確な区切りはありませんでした(3)。ただ、寛永期の絵図には堀の南側の一部には幕



【江戸時代～明治時代初めの大堀】

1 福岡城や城下町が建設される以前の地形推定図。荒戸山の南側を入り口として、樋井川が流れ込む入江がひろがっていたと推定される。入江の入り口を埋め立てたことで現在の荒戸2丁目や3丁目あたりの土地が造成された 2 寛永9(1632)年から間もない頃の様子を描いた絵図。大堀の西側を流れるのは樋井川。南西側は陸地と堀との境界がはっきりとは描かれていない。大堀の南側の水田が描かれた箇所に貼られた付箋に幕府の許可を得て新田としたことが記される 3 正保期(1644～1647)の大堀。大堀の南側一帯に植物が繁茂している様子がうかがえる。南西側は陸地と水面の境がはっきりと分かるようになっている 4 安永6(1777)年に作成された図。西側の一部が埋め立てられ大堀の形が変わっており、南西側には堀に沿う形で道路が敷かれている 5 明治時代の大堀を追廻橋付近から撮影した写真。手前左下に堀を囲う石垣の一部が見えている。奥の右側には張り出す木々に隠れるように花見櫓が見える。堀の水面を覆う植物が多く見られ、水深が浅くなっていることがうかがえる

府から許可を得て開発した水田が描かれており、徐々に周囲の整備が進められていました(2)。堀の境界があいまいだった大堀の西側と南側は、延宝七(一六七九)年に土手が完成し、あわせて道路も設けられました(4)。また、土手に隣接する土砂で埋もれた土地は、新田として鳥飼村に与えられました(『新訂黒田家譜』)。大堀の形はようやくここで定まり、近代に至るまで変わることはありませんでした。

完成した堀は南北三二〇間(約六〇七・六メートル)、東西は三〇〇間(約五八八メートル)と大で(『福岡城下町・博多・近隣古図』)、水深は三尺二寸五分(約一・五メートル)ほどでした(『福博惣絵図』)。

堀はいらない

こうして長い年月をかけて整備された大堀ですが、土砂の堆積は続いたため、福岡藩はその対応に追われました。基本的には浚渫して土砂を取り除くのですが、工事費用の工面や土砂の処理については毎回苦慮したようです。

最も古い浚渫の記録は、寛文十一(二六七二)年のもので、城の周囲の堀も含めた大規模な工事のため数年がかかったとあります(『新訂黒田家譜』)。その後、寛保元(一七四一)年にも、再び幕府へ浚渫の願いが出されています(『新訂黒田家譜』)。

これに対し幕府からは、浚渫は毎年行つてよいとの許可が出たようです(『殿中日記』)。しかし、財政の問題からか定期的な浚渫は行われませんでした。十九世紀には、大堀を含めた城廻りの堀だけでなく、城の東側にある肥前堀・中堀までもを含めた堀全体の浚渫が藩の課題となっていました。

福岡藩では、文化五(一八〇八)年にイギリス軍艦が長崎港に侵入したフエートン号事件の影響で、長崎警備関連の支出が増え、財政がきびしい状況になりました。そのため浚渫の費用が捻出できず、数年来放置したままでいました。文化十一年には、家老から浚渫の担当者である御要害奉行(おごうがいせきこうじょう)奉行に対して、対応策の提出が命じられました。奉行から出された案は、黒門川下流に閘板(せきいた)をつまみ、板を並べて水を堰き止めることで水位を上げるといったものでした。また、樋井川から水を引く案も出されましたが、測量の結果、この案は難しく、閘板の設置が採用されました。この方法は早速効果をあげ、二カ月で一尺五寸(約四五センチメートル)の増水に成功しました。

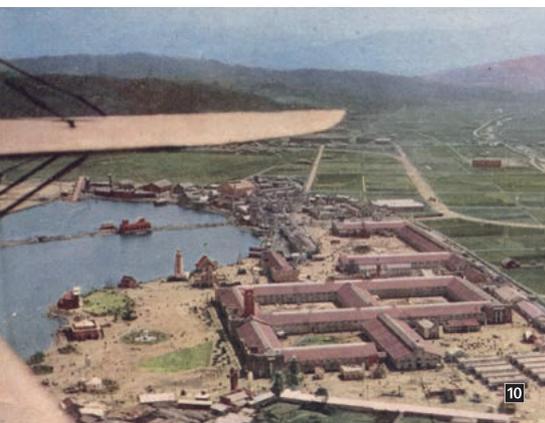
しかし、ここで藩主黒田斉清から閘板撤去の強い要請が出されます。その理由として、①水が溜まると「死水」となり水が腐れて悪臭が発生すること、②城内が湿気がちになり、石垣にも悪影響を与えること、が挙げられました。そして、堀が



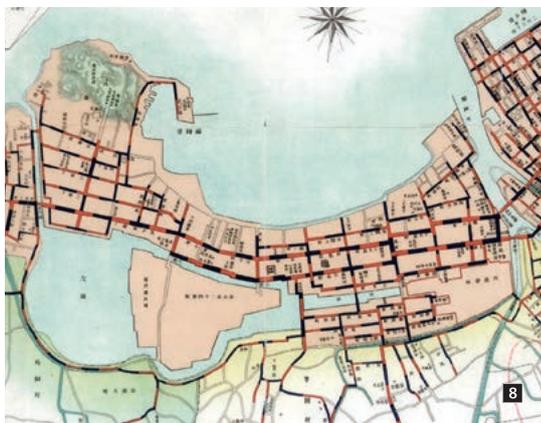
9



7



10



8



6

少々干上がったも構わないので元の通り水を流すようにとの意向が示されました。

家臣たちは、大堀を城郭を守る重要な施設として捉えていました。だからこそ、根本的な解決策とはならないことを理解しながらも、堀としての機能を保つために、水を堰き止めて水位を上げるという方法を取りました。一方、藩主斉清は、「干上がったも構わない」との言葉が示すように、堀を防御施設として捉えていないようでした。

斉清の案に対して家老による説得が行われましたが、結局関板は撤去されました。案の定、堀の水位は下がり、三年後には大堀のなかに干上がる箇所が現れ、川のような流れができるほどの状況となりました（殿中日記）。

この一件は、堀に対する藩主と家臣たちの認識の違いを如実にあらわす出来事でした。

●大堀の管理者は誰？

明治四（一八七二）年の廃藩置県により全国の城郭はすべて明治政府に接収され、福岡城も国の所有となりました。大堀を含む城周辺の堀は、国の機関である兵部省（のちの陸軍省）の管轄でした。そしてこれ以降、大堀の管理はさまざまな事情であちこちに移されていくこととなります。

明治十一年、県は新道の開設と周辺の開発を目的に、陸軍省へ大堀の利用を要望します。この要

望はその管理と併せて受理されました。結局、目的の開発は実現しませんでした。大堀の管理はそのままこの時点で軍から県へと移されます。

ここで、堀の北にある荒津山に荒津山公園（明治三十三年〜西公園）が登場します。開園は明治十四年のことです。実は大堀は、荒津山公園の「附属地」とされていました。

同二十二年からは福岡市が荒津山公園の管理を引き受け、福岡市はそれを地元の有志団体である「愛勝会」に委託していました。公園の維持管理費は、大堀を公園の附属地として、そこから得られた収入を充てた、と現在も西公園に残る記念碑に記されています。大堀は西公園の附属地となったことで、今度は県から公園を管理する福岡市の管轄になっていくことが分かります。

しかし、公園と大堀は明治三十三年度から再び県に移管され、以後現在まで県が管理する場所となりました。大堀の管理者はとも短い間に、軍、県、市と、めまぐるしく変わっていました。

●大堀は一大漁場に

では荒津山公園の維持管理費を支えた「大堀から得られた収入」とは何だったのでしょうか。明治二十四年に福岡市議会で報告された公園維持金の收支調査を見ると、同二十二年度の収入項目に「大堀魚鳥請負料并二下草採料」が計上されています。



6 明治11年にわけられた大堀の管轄区域を示す図。朱線で区切られた城に近い部分が陸軍省、その西側が福岡県の管轄となった 7 大正期の絵葉書に写された大堀。北西側から撮影したと思われる。土砂が堆積し、葦が繁茂している 8 明治42年の市街図。肥前堀は中堀から東側に伸びて、那珂川に接続していた。図右の「共進会場」の北側半分の部分にあたる 9 大正11年の長政公参百年祭記念家庭博覧会で撮影された大堀。西公園参道の延長上に堀中に鳥居を建てている。現在の西公園入口交差点付近から撮影したと推測される 10 昭和2年東亜勸業博覧会会場を北側の上空から撮影した写真。着色を施している 11 東亜勸業博覧会開催中に発行された市街図。図では城に近い部分の堀が埋め立てられずに残っているが、これが実情を反映させたものかどうかは不明

す。収入とは、大堀における魚や鳥の漁猟と下草の伐採により得られる利益のことでした。

江戸時代、大堀から獲れた魚や貝は、藩主から家臣への下賜品とされました。そのため、庶民の立ち入りや釣りを含めた漁は禁止されており、これが多くの生き物にとって堀が棲みやすい環境となる下地を作りました。

明治時代になると堀の利用は可能になりましたが、その場合は県↓内務省↓陸軍省と申請を上げ、その可否を問い合わせるといった手続きが必要とな

りました。実際に、堀の水産資源に目をつけた士族や民間事業者たちが、魚の漁や養殖を目的に、堀の利用申請を出しています。

このように新たな漁場となった大堀から上がる収益は、明治二十三年の記録では四四円余となっています。実は明治九年（一説では十年）にできた東公園の維持管理費も、その一部は大堀からの収益で賄われており、こちらは五四円余で、あわせて九八円余です。大堀は、それだけ多くの利益を上げるほどの好漁場でした。

その後も、大正五（一九一六）年の堀の清掃に伴って水が抜かれた時には、フナ千斤、ウナギ二百斤、コイ百斤（二斤は六〇〇グラム）に及ぶ魚が獲れ、これらの魚は大阪へ運ばれたといえます。大正十二年には「江切」という漁獲イベントが行われました。このイベントは、料金三円を参加費として支払って漁をするもので、福岡だけでなく、佐賀・佐世保・熊本などの遠隔地から総勢四三〇人の参加者が集まったそうです。この時にはコイ・フナ・ボラ・スズキなどが獲れ、この江切は同十四年にも行われました。

● 大堀の埋め立て論

一方、明治期から堀には問題点もありました。明治末期、大堀に大きな変化が訪れます。明治四十三年に第一三回九州沖繩八県連合共進会が大

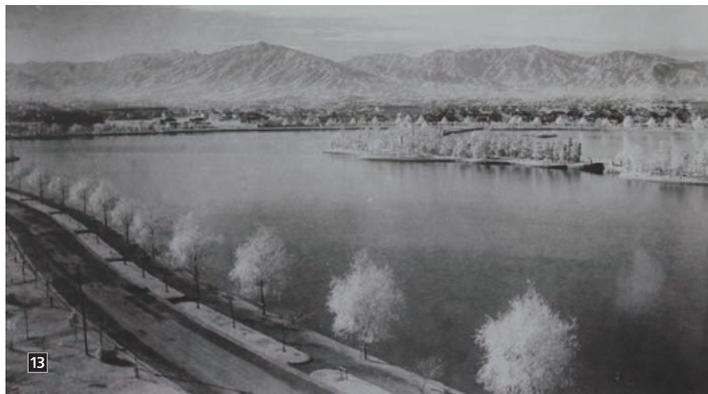
堀の東側で開催され、この会場整備にともなって肥前堀が埋め立てられました。肥前堀からは大堀に那珂川や薬院新川の水が流れ込んでいたが、埋め立てによって、水の出入りは黒門川に限られてしまいました。

水流の変化が影響したのか、夏になると大堀には「粉蛾」が大量発生するようになったといえます。明治四十三年、福岡県は養殖池とするため軍が管轄する堀を借用していますが、これは粉蛾の駆除対策の一環でもあったようです。この粉蛾問題はは大正元年の『福岡日日新聞』に大きく取り上げられました。被害悪化の原因は、養殖業者が海水の流入を防止したことにある、というのです。

粉蛾対策として行った養殖でしたが、黒門川口を閉じたことで、それまで潮の干満によって流れ出していた汚泥が堆積し、水質が悪化。それにより粉蛾の発生が促進されたという主張でした。

これら水質悪化や粉蛾の被害により、大正時代になると大堀埋め立ての議論が噴出し、その用途についてもさまざまな意見が出されるようになりました。

たとえば、福岡市長を務めた佐藤平太郎は、大堀を埋め立てて競馬場を作る構想を持っていました。当時、競馬は優れた軍馬育成のためにも推奨されており、これには福岡城に駐屯する歩兵第二四連隊長の横地長幹も賛同したといえます。一



12 昭和3年頃の大堀の様子。すでに埋立が終わり、公園造成が行われている。写真右側には水面と中之島がある。写真左側にプールと観覧席が見えるが、これは県営水泳場（昭和3年6月完成）で、周囲のフェンスが見えたらため建設中であろう。よって時期は昭和3年上半期と考えられる 13 昭和12年に出版された写真帳に掲載されている大濠公園の写真。開園後間もない時期の公園の様子がわかる 14 埋立地の西南側は、昭和3～10年に順次売却され、文化住宅が立ち並んだ。この写真を収録した写真帳の説明には「朝に夕に眺むる公園の景色は我が家の庭の様」と書かれている

方で実業家・団琢磨^{だんたくま}は、大堀を水の公園として整備する案を推していたようです。城内にあった歩兵第二四連隊を別の場所に移転させ、福岡城を含めた大公園とすると良い、と大正八年に新聞紙上で述べました。

さらに大正五年に福岡で陸軍大演習が開催されることが決まると、天皇が閲兵を行う城外練兵場の北側に隣接する大堀をそのままにしているは見苦しいという理由から、埋め立て論は力を増します。県は約五千円の経費を投じて土砂の除去などの清掃を行いました。この県の対策は小手先という批判もあり、埋め立てに対する要望は根強く残りました。

その後、福岡市から東亜勸業博覧会の開催地と

して大堀を利用したいとの要望が出たことを契機に、県では博覧会後に大堀を県営公園として整備し、不用地を売却するという案が持ち上がりました。これは県にとっても利益が大きいことから、大正十四年十二月十四日の福岡県会において満場一致で可決され、大堀の埋め立て問題は決着をみました。

こうして昭和二（一九二七）年に大堀で東亜勸業博覧会が開幕、その後、昭和四年には県営公園が完成し、大堀は「大濠公園」になりました。

● 今からの大濠公園

大濠公園は昭和四年の開園から九〇年以上が経過しました。公園はその時々の人びとの憩いの場

としてあり続けました。しかし、それは決して平坦な道のりではありませんでした。土砂や生活排水の流入による水質汚染やそれともなう臭気の問題、周回道路を自動車が行くことでの排気ガス問題、治安問題など多くの問題を抱えていました。特に水質悪化と臭気の問題においては、多くの人びとがその解決に向けての運動を展開し、尽力しました。

現在は多くの問題が解決されました。しかし、これまでの歴史を振り返ると問題が出るたびに全面埋め立ての議論がなされてきました。水や緑にあふれた「憩いの場」は当たり前ではありませんでした。これからも水と緑豊かな大濠公園が続いていくためには、人びとの環境に対する意識や努力が重要だということを忘れてはいけません。しよう。

大堀で獺祭?



大堀（大濠公園）に多くの魚がいたことは、特集をご覧くださいただければお分かりになると思います。大堀の魚を食べる、ある動物が棲んでいたかもしれない。そんなお話です。

その動物とは平成 24（2012）年に絶滅種に指定された「ニホンカワウソ」です。

慶応^{けいおう}2(1866)年9月4日のお昼過ぎに珍客が登場します。場所は藩主^{からいぬ}の居所である三の丸御殿の御庭です。御庭は大堀の土手を登ったすぐ先です。そこで御殿で飼われていた唐犬とカワウソが激闘を繰り広げます。おそらく唐犬が勝利したのでしょう。そのときの戦利品であるカワウソのヒゲと伝えられるものが福岡市博物館に収められています（前田多市資料「カワウソヒゲ」）。

カワウソは、江戸時代には食用とされていました。食べ合わせが悪いものとして兔、鶏、蜜が挙げられるほど、食べられていたことがわかります（武谷文庫「御同食禁忌」、九州大学蔵）。

城周りの堀では、釣りや漁はもちろん、堀に人が入ることも許されませんでした。餌となる魚がたくさん泳ぎ、葦が繁茂^{すみか}し、人間がほとんど入らない大堀は、カワウソにとって恰好の棲家だったといえるでしょう。

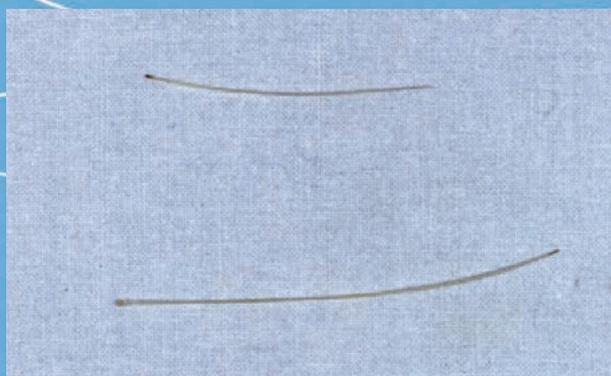
福岡市博物館にあるものが本当にカワウソのヒゲなのか、科学的に調べてみないと分かりませんが、本物であればカワウソが大堀に棲んでいたと考えられますし、もしかしたら当時は、大堀でカワウソが捕まえた魚を並べる「獺祭^{だつさい}」が見られたのかもしれない。



▲狩野探幽筆「獺図」（17世紀、黒田資料）。福岡藩主黒田家に伝来したカワウソの絵。作者は狩野派全盛の基礎を築いた江戸幕府の御用絵師。精緻に描かれているが、近年の研究で足先、鼻筋、耳、眼の描写が実際のカワウソとは少し異なる点が指摘されている。黒田家に入った経緯は未詳



◀大正時代の城内練兵場の図。江戸時代に藩主御殿の庭園があったのは図の上部の池が描かれている付近。池は昭和20年代前半に埋められた



▲カワウソヒゲ（1866年採集、前田多市資料）。旧福岡藩士前田家に伝来したカワウソのヒゲ。包紙には「慶応二丙寅年九月四日昼九ツ時比ヨリ八ツ時比迄之間 御館御庭ニ而唐犬ト戦其鬚取之」とある。写真は原寸大

【参考文献】 荒井周夫編『福岡県碑誌』筑前之部（大道学館出版部、1929年） ● 伊東尾四郎校訂『筑前国統風土記』（文献出版、2001年） ● 川添昭二・福岡古文書を読む会編『新訂黒田家譜』第二巻・第四巻（文献出版、1982年） ● 島崎昌明「大濠公園池浄化対策事業」（『新都市』平成元年8月号、都市計画協会、1989年） ● 『西日本新聞』（西日本新聞社） ● 福岡市議会編『福岡市議会史』第一巻 明治編（福岡市議会、1971年） ● 福岡市史編集委員会編『新修福岡市史』民俗編一 春夏秋冬・起居往来（福岡市、2012年） ● 福岡市史編集委員会編『新修福岡市史』特別編福岡城 築城から現代まで（福岡市、2013年） ● 福岡県議会議事事務局編『詳説福岡県議会史』明治編下巻（福岡県議会、1953年） ● 『福岡日日新聞』（福岡日日新聞社） ● 『福陵新報』（福陵新報社）

【所蔵】 国立公文書館→P.4 ⑥ ● 福岡市博物館→P.3 ③・⑤・P.4 ⑦・⑩・P.6 ⑫・⑬・⑭・P.7 右下 ● 福岡県立図書館→P.3 ④・P.4 ⑧・P.5 ⑪ ● 九州大学附属図書館付設記録資料館→P.3 ②・P.4 ⑨ ● 福岡市美術館→P.7 右上

【転載】 福岡市史編集委員会編『新修福岡市史』特別編福岡城 築城から現代まで（福岡市、2013年）→P.3 ①・P.7 左

レポート

その後の「市史だより」の現場

●ドームの周辺～22号～

本誌22号では、シーサイドももちを特集しました。全国でかつてニュータウンとよばれたまちの再生が求められるなか、ここは人が集まるニュータウンとして元気な姿を見せていました。写真はそのときに掲載したドーム球場の周辺です。ホークスタウンの横にインバウンドの観光バスがずらりと並んでいる姿が印象的です。

そして久しぶりに見たこの場所は、さらにアップデートされていました。「福岡ヤフオク!ドーム」から「福岡 PayPay ドーム」に名前が変わったドーム球場は、道の向こうにわずかに姿を見せるだけになっています。写真左のホークスタウンの跡地には、「MARK IS 福岡ももち」がオープンし（平成30〈2018〉年）、その隣には「ザ・パークハウス福岡タワーズ」の2棟の高層マンションが立ち並びました。実際に見てみると、どちらも海辺のまちらしくデザインされた建物です。さらに写真奥に見える「BOSS・ZO FUKUOKA」（令和2〈2020〉年開業）は、福岡ならではのユニークなエンターテインメントを新たに提供しています。シーサイドもちはようやく30年を超えた新しいまちですが、日々こうして景色を少しずつ変えています。5年後、10年後、このまちがどのように成長していくのか、楽しみです。



2016年

2021年

●^{すせんじ}周船寺の倉庫～24号～

本誌24号では、糸島と福岡の交差点として歴史を歩んできた周船寺を特集しました。大正時代に鉄道が通り、周船寺駅ができたことで、糸島郡の東の拠点となったまちは、^{にぎ}おおいに賑わっていきました。

ところで、この24号の表紙を覚えていらっしゃるでしょうか？表紙の建物は、周船寺駅そばの「JA 福岡市周船寺倉庫」です。もともとこの倉庫は、農業倉庫業法（大正6〈1917〉年から施行）によって、昭和初期に建てられた農業倉庫でした。全国につくられた農業倉庫は、当時各地の産業組合などによって経営され、米の価格を安定させる役割なども担いました。福岡県内だけでも、昭和6（1931）年時点で279棟あったとされます（『福岡県産業組合及農業倉庫分布地図』昭和7年発行）。

周船寺の農業倉庫は、今でいうなら駅近の物件で、ものを運ぶにはもってこいの立地。駅を中心にしながら、糸島郡東部の拠点として発展した周船寺の歴史を思い起こさせる建物の1つでした。

その後の農業倉庫は、時代によって役割を変えながら、近年まで使われてきたものも多かったのですが（農業倉庫業法は平成27〈2015〉年に廃止）、老朽化によってしだいに姿を消すものも増えています。周船寺の倉庫もその1つ。長い間、同じ場所でまちの移り変わりを見つめてきたこの倉庫も、2021年にその役目を終えました。

表紙の写真のために、まちの変遷を象徴するような風景を撮ろうとしていたとき、偶然この倉庫を見かけたのが3年ほど前。こうして写真を見比べてみると、まちが次の時代に向かっていく節目に立ち会った思いがします。



2021年



2019年



2021年



● 考古

大正から昭和にかけて福岡で活躍した、中山平次郎博士をご存知ですか。病理学者であった博士は福岡医科大学（現九州大学医学部）に赴任後、本業の傍ら少年時代から関心を寄せていた考古学研究に精力的に取り組みました。専門雑誌や新聞に数々の論説を発表し、のちに弥生時代とよばれる「中間期間」を提唱し、鴻臚館の場所を特定するなど、多大な研究成果を残しています。また「元寇防塁」の名付け親でもありました。

令和三（二〇二二）年は、中山平次郎博士生誕一五〇年でした。『資料編 考古』シリーズでは、中山博士の学説など、行政発掘調査以前の調査史についても取り上げています。

● 近世

近世専門部会では、『資料編 近世4』の編集に向けて資料の収集を継続しています。先日、ある史料群の調査の折に、古い襖の下に古文書が張り込まれていることが判明しました。さっそく調査を行うことになりましたが、襖の下張り文書を調査するのは今回が初めてです。勝手が分からないため、これまでに行われた調査の事例や方法を調べながら、手探りで作業となりました。

下張りには、不要になった反古紙が使われることが多くあります。いわば「捨てられたかもしれない歴史」です。もしかしたら調査によって救出された史料から新たな歴史が明らかになるかもしれません。

● 古代

福岡の古代の風景がわかる資料を集めています。その一つに平安時代の僧、蓮禪の漢詩があります（『本朝無題詩』所収）。一例を紹介すると、ある旧曆二月のこと、夕陽に赤く染まったかすみのなかで、香椎宮そばの水辺ではシラサギが魚を狙っています。アシが生い繁る岸辺では、老齢の漁師が舟をおりて、今日の獲物と酒を交換しており、当の蓮禪はというと、門前で塩を売る商人と、塩の値段について話し込んでいたようです。

今は埋め立てで海から離れた香椎宮ですが、海のそばだったころの景色と、そこに暮らす人びとの姿が目浮かび、つい作業の手も止まってしまいます。

● 近現代

今号の特集では、あまり語られていない明治・大正期の大堀を描きましたが、これは歴史的な公文書のインターネット公開が進んでいる成果でもあります。

そのなかで大堀だけでなく、城廻の堀についても新資料を確認しました。大正九（一九二〇）年に福岡市は、堀の埋立と払下げを請願する決議を行いました。この請願は陸軍によって却下されますが、軍は福岡県から出された反対意見を重視していたことが分かりました。この資料は『資料編 近現代3』に収録する予定です。

● 中世

「画賛」をご存知でしょうか。水墨画や肖像画の余白に書き添えられた詩文のことで、美術分野ではよく知られたものですが、この画賛も編集作業中の『資料編 中世3』に収録する予定です。とくに肖像画に添えられた画賛はその人物の業績について記されており、当時の状況についても記されていない情報が含まれていることもあります。

美術品は芸術的な視点で語られることが多いと思いますが、歴史的な視点から検討する場合にも重要な情報を与えてくれる存在でもあるのです。

● 民俗

福岡の夏の風物詩として知られた大濠の花火大会は、昭和二十四（一九四九）年八月十九日に第一回が開催されました。新聞ではこの「光の供宴」に十万人の観衆が歓声をあげたと報じています（『西日本新聞』昭和二十四年八月二十日）。この大会は毎年の恒例となり、休止を挟みつつ平成三三（二〇二一）年まで開催されました。福岡の夜を彩ってきた長い足跡を持つ大会で、これからも夏の思い出として語り継がれることでしょう。

現在制作中の『民俗編 三夜』では、こうした夜ならではの楽しみなども取り上げる予定です。

新修 福岡市史

ナナメ読み

その6

資料編 中世1 市内所在文書

今回の
ナナメ読みは

福岡の中世文書から見える日本の歴史

みなさんは「福岡の中世といえは？」と聞かれたときに何を思い浮かべますか？やは

り国際都市「博多」でしょうか。いやいや元

寇防塁も有名だぞ、櫛田神社も管崎宮もある

し、聖福寺に、承天寺もあるじゃないか。人

物ではやっぱり豊田秀吉？でも博多商人の

神屋宗湛・島井宗室、臨濟宗の聖一・国師も忘

れちゃいけないし、そうか足利尊氏も……と、

挙げはじめると切りがないかも知れません。

こんな盛りだくさんの福岡の中世が記され

た、あれやこれやの古文書のうち、福岡市内

に今もあるものだけを一冊にまとめたのが、

『新修 福岡市史 資料編 中世1 市内所在文

書』です。十一世紀後半から慶長五(一六〇〇)

年までの古文書を掲載し、その数はなんと

二二〇〇点を超えます。当時に書かれたもの

や、後世に写されたものまで、中世を物語る

古文書がこれだけたくさん市内に残されてい

たとは本当にびっくりです。だって四〇〇年

以上もむかしのものが、この現代にまで大事に伝えられてきたわけですから。

ところで、これらの古文書には福岡市内の

歴史はもちろん、市外のことを物語るものが

意外に多く含まれています。なかには、「何

で？」と首をかき上げるものまであります。た

とえば、「黒田家文書」(福岡市博物館所蔵)

のなかにある、清正公(せいしよこ)さんこ

と、加藤清正の書状。「なんだ、清正が黒田

如水が長政に送ったものじゃないの？」と思

われるかもしれません。ところが全八通のうち、

三通は徳川家康の側近、一通は清正の家

臣宛て(写真)なのです。

そのうち家臣宛ての書状(七六三頁)を讀

んでみると、関ヶ原の戦いの前に大坂を脱出

した清正の正室を、熊本へ送り届ける際に不

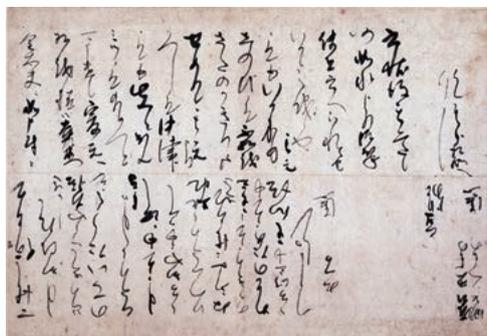
手際があったようで、これを叱責したもので

した。こんな加藤家の内輪話を記した書状を、

なぜ黒田家を持っていたのか……。謎です。



A5判 上製本 1,000頁
※完売しました。
お近くの図書館でご覧ください。



▲「加藤清正書状」(福岡市博物館蔵)

福岡市にある古文書のなかに、こうした市外の歴史を語るものがあるということは、当然、福岡市外にも福岡市の歴史を語る古文書が残されているということになるでしょう。つまり、『資料編 中世1』だけでは、福岡の中世を語り尽くしたとはいえないわけですよ。ご安心ください、ちゃんと『中世2』という本があります。このお話はまた今度に。

電話申込み・店頭販売

福岡市博物館 ミュージアムショップ (福岡市早良区百道浜 3-1-1)
☎ 092-823-2800

店頭販売

政府刊行物 福岡市役所内サービスステーション
(福岡市中央区天神 1-8-1 福岡市役所 地下1階) ☎ 092-722-4861

ジュンク堂 福岡店 (福岡市中央区大名 1-15-1 天神西通りスクエア 1~3階) ☎ 092-738-3322

丸善 博多店 (福岡市博多区博多駅中央街 1-1 JR博多シティ 8F) ☎ 092-413-5401

お問い合わせ先

福岡市博物館 市史編さん室 (福岡市早良区百道浜 3-1-1)
☎ 092-845-5245



タイムマシンで となりの駅へ

— 近過去への旅 —

第6回

文＝有馬学（福岡市史編集委員会委員長／福岡市博物館総館長）

絵＝新田岳（cubicface）

text_ManabuARIMA, illustration_Takeshi NITTA

予兆する写真

写真家、批評家として刺激的な著作を数多く著している港 千尋みなとちひろさんに、『予兆としての写真—映像原論—』（岩波書店、2000年）という本がある。とても魅力的な、しかし考えようによってはちょっと怖くもある、ゾクッとするタイトルである。写真は過ぎ去った過去のイメージを残すものとするのが私たちの常識だが、著者によれば、多くの写真家や映像作家は、イメージが未来に属するという考えを持っているのだそうだ。一見難しそうな写真論に見えるが、「決定的瞬間」と言われるようなイメージは、「来るべきものを予感してシャッターが切られたような、不思議な印象を与える」と言われると、ああそうだよなと素直に納得できる。

もっと身近な例に移して考えてみよう。多くの人にとって、来るべきものを予感してシャッターを切ったとしか思えない写真というのがあるはずだ。たとえば昭和30（1955）年前後の東京を写した写真である。私が小学校高学年の頃の東京だから、私にはもちろん懐かしい。そう思う人は多いらしく、書店に行くと同じようなコンセプトの写真集がたくさん並んでいる。

不思議に思うのは、なぜ昭和30年前後なのだろうということだ。なぜその時代に、これだけの密度で、東京の街角とそこを歩き過ぎる人々にシャッターが切られたのか。これが5年後の昭和35年となると、所得倍増計画を引っ提げた池田勇人いけだはやお内閣が登場した年であり、経済の高度成長で東京といわず日本列島全体が激変する喧噪の時代が始まってしまふ。逆に5年前の昭和25年なら、まだ焼け跡・闇市の匂いが残り、戦争の記憶は人々の脳裏から去っていなかっただろう。どちらにしても都市の表情は、今日の私たちに懐かしい、ホッとするという感情を起こさせる昭和30年前後のそれとは異なっていたはずだ。

そう考えると、昭和30年前後というのは、まことに絶妙のタイミングに思える。この時代を、「昭和ベルエポック」とか「小春日和」と表現したのは評論家の川本三郎さんだが、見事な表現だと思う。同時代人である私の実感にピタリとはまる。敗戦直後の食うや食わずの時代はなんとか脱した。でも追われるように経済成長にひた走るせわしない時代までは、ほんの少し時間がある。貧しいながらもどこかにホッと一息感があったのが、昭和30年前後だ。

だからこそ不思議なのだ。その時シャッターを切ったカメラマンは、来るべき列島の激変を予兆して、今でなければ戦後の小春日和を記録に残せないと考えてシャッターを切ったのだろうか。そんなことがあるはずはない。しかし、いま残されたその時代のイメージを眺める私たちには、それらの写真は来るべき未来を予兆してシャッターが切られたとしか思えないのである。

もっと身近に、福岡という町の記憶に沿って考えてみよう。私の念頭にあるのは、井上孝治さん（故人）や北島寛さんの写真だ。井上孝治さんは福岡市内で写真店を営みながら、作品が何度もサロン（写真雑誌などの公募展）に入選するような写真家でもあった。しかし現在では、写真集『思い出の街』（河出書房新社、1989年）など、福岡の街とふつうの市民の日常を写した写真家として知られている。それらの写真は、いかにもサロン受けしそうな井上さんの他の写真とは全く異なる表情をしている。そしてそのほとんどが昭和30年前後に撮られているのだ。

『思い出の街』は世に出て評判を呼び、ついにはパリで展覧会が開かれるまでになった。しかしご子息の井上孝治はじめさんとすると、そもそもご本人には公表する意図など全くなく、ネガは長い間押し入れにしまわれたままであったという。井上孝治さんが、一方でサロンに投稿するためのいわゆる芸術写真を撮りながら、他方で全く発表の意図を持たない街角の写真を撮り続けたのはなぜなのだろうか。

福岡市史の特別編『活字メディアの時代』の編集を通して眺め続けた北島寛さんの写真*もそうだが、彼らはなぜ昭和30年前後という時期に、市井の人々にレンズを向けたのだろうか。ご本人にうかがっても、撮りたいから撮ったという返事しか返ってこないだろう。しかし現在の私たちから見ると、その後の日本社会の激変を予兆しながらシャッターが切られたとしか思えないイメージなのである。

写真家はただ撮りたいから撮った。そこに来たるべき未来の予兆を見るのは、私たちがそのようなものとして写真を見るからだ。この関係は、歴史を考えるとという行為と親和性が強いと思う。そこではイメージを通して、過去と現在の往還が行われる。それは私たちが、出来事の結果をすべて知ることが出来るという、後から来た者の特権を持っているからだ。だが持っているということと、それを行使できるということは同じではない。

言葉の上で、昭和30年前後の福岡の街と語ってみても、それは漠然とした時間の塊でしかない。しかし写真家がシャッターを切るのは一瞬であり、そのようにして残されたイメージはすべて「決定的瞬間」である。来るべき未来の姿など知るはずもない写真家の「決定的瞬間」が秘める予兆に、私たちの歴史観は拮抗することが出来るだろうか。そう考えると、『思い出の街』の懐かしさにも、ちょっと恐ろしいものがある。

*『街角の記憶 昭和30年代の福岡・博多』（海鳥社、2012年）など

福岡市史への歩みの歩み

本誌第2号から25号にかけて、元福岡市博物館顧問・田坂大藏氏^{たさかだいぞう}により連載された「福岡市史への歩み」は前号の第24回をもって最終回を迎えました。そこで今回は、田坂氏が紹介した戦前から平成に至る「福岡市史への歩み」を時系列で整理した特別編をお送りします。できごとの末尾に連載回を入れていきますので、ご活用いただければ幸いです。
※ 連載回に1足した数字が掲載されている市史だよりの号数です。

年	月	市史編さん事業に関するできごと
大正3年	4月	高野江基太郎ら雑誌「筑紫史談」を創刊する(6)
大正9年	11月	宇佐書紀、「市史編さん大綱」の調査を命じられる(2・3・5)
大正14年	9月	有吉憲彰、雑誌「福岡」を創刊する(6)
昭和2年		永島芳郎、市史編纂担当者に任命される(2・3・5)
昭和3年	4月	福岡市教育支会、「福岡史要」を刊行する(5)
昭和4年	11月	「筆耕」1名、雇用(3)
昭和7年	4月	「筆耕」1名、増員(3)
昭和8年	4月	臨時雇いだった係員が正式な「福岡市雇」職員となる(3) 「福岡市公報」等への寄稿が続く(3) 薬王密寺東光院の保存運動に奔走する(3・4)
昭和9年	3月	次年度予算で印刷費500円が削減される(4)
昭和11年	4月	福岡市教育会、「福岡史考」を刊行する(5)
昭和13年		市制施行50年史の編纂に着手(2・6)
昭和14年	3月	「福岡市市制施行五十年史」刊行(2・6) 市史編纂事業、小規模ながら継続する(2)
昭和23年		永島芳郎、没し、伊東尾四郎が後任となる(7・10)
昭和24年	8月	伊東尾四郎、没す(7・10)
昭和25年	3月	三好市長を会長とする「福岡」刊行会、「福岡」を刊行(9) 小野有耶介、市史担当嘱託となり、6月に正規職員となる(2・7・8・10・12)
	10月	「福岡市史編纂に対する構想」策定される(2・8・10・12)
	11月	「福岡市市史編さん委員会規程」策定される(2・8・10・12)
昭和26年	7月	第一回編纂委員会、流会。事業は無期延期となる。(2・8・12)
昭和27年	6月	小野、市長に宛てて「市史編さんに関する上申書」を作成(8・12)
昭和31年	6月	市史編纂委員会が招集される(13)
昭和34年	3月	「福岡市史 第1巻 明治編」刊行(14・15)
昭和36年	3月	「福岡市史 明治編 資料集」刊行(15)
昭和42年		「元寇防堡保存整備懇談会」設置、「史跡元寇防堡関係編年史料」刊行(16)
昭和46年	3月	「注解元寇防堡編年史料」刊行(16)
昭和48年		福岡市文化財保護条例制定(1・16・17)
昭和50年		「蒙古襲来絵詞」複製出版(16)
昭和57年	11月	福岡市、フランス・ポルドー市と姉妹都市締結。この後、絵本仕立ての歴史本「ポルドーの歴史」が贈られ、市史の構想に影響を与える(18・19)
平成10年	3月	行政資料中心の「福岡市史」の編纂が終了(20)
	11月	「福岡市文化賞」表彰式後、武野要子教育委員が桑原市長に本格的な自治体史の編さん開始を懇請する(20)、市長交代する(21・22)、市史編さん事業予算がわずかに認められる(22)
平成12年		総務企画局で市史編さん事業費として518万3000円が計上される(24)
平成16年	1月	山崎市長、市史編さん事業費として7000万円の復活予算要求を承認する(24)
	4月	「新修福岡市史」の編さん事業が本格的に開始する(23)
平成22年	8月	吉田市長、定例記者会見で「新修福岡市史」の刊行を発表する(13)
平成30年	3月	川添昭二九州大学名誉教授(福岡市史編さん委員会相談役)、没す(23)

お詫び

既刊の「市史だよりのFukuoka」に下記の誤りがありました。お詫びして訂正いたします。
・22号 P.6【誤】山王病院 → 【正】福岡山王病院 / P.7【誤】SPRビル → 【正】SRPビル
・25号 P.10【誤】多門橋 → 【正】多聞橋

表紙の写真 歴史を見つめる [大濠公園]

表紙の写真は、大濠公園内北西にかかる舞鶴橋を北側から撮影したものです。奥にはNHK福岡放送局が顔をのぞかせています。橋の竣工は中之島にかかる観月橋・茶村橋・五月橋と同じく昭和2(1926)年3月で、東亜勸業博覧会が開催される直前になります。ということは、舞鶴橋は竣工からもう少しで100年を迎えようとしています。大濠の水面は変わりませんが、周囲の建物はすっかり様変わりしました。同じ時期の建築物で変わらないのは、福岡管区気象台の旧館(昭和6年)と、かんぽ生命保険福岡サービスセンター(旧福岡簡易保険支局、昭和9年)くらいでしょうか。

舞鶴橋は、大濠100年の歴史を見つめてきました。これからも見続けることでしょう。橋の欄干は座ることができる構造になっています。しばし足を止めて、欄干に座り、橋と共に同じ歴史を見つめる時間もステキではないでしょうか。

福岡市史についての最新情報はこちらから。「市史だよりのFukuoka」のバックナンバーも見られます!

福岡市史ホームページ ▶ <https://www.city.fukuoka.lg.jp/shishi/>

福岡市博物館の情報はこちらから。

福岡市博物館ホームページ ▶ <http://museum.city.fukuoka.jp/>

Printed in Japan.

Copyright by Fukuoka City Museum

本誌掲載の写真・図版・記事などの無断複写・転載を禁じます。